

## 授業特別協力者(ゲストスピーカー)報告書

**テーマ** : 多文化共生社会を実現するために必要なこと  
**授業特別協力者名** : 岩澤 直美 氏  
**実施日時** : 2021年6月24日(木) 3時限  
**担当教員名** : 栗原 文子  
**授業科目名** : ベーシック演習Ⅰ  
**履修者数** : 18名

### 実施結果

「多様性×教育」を軸としたサービスを展開する株式会社 Culmony 代表取締役の岩澤直美さんに異文化理解や共生社会のために必要なことについて、お話しいただいた。岩澤さんご自身の生い立ちや外国での生活、大学時代の世界1周旅行のお話、マイクロアグレッションやステレオタイプ、偏見、多文化共生の取り組み、異文化を楽しむためのコツなど、多岐にわたりお話しいただき、留学や将来海外で仕事をすることを目指す学生に対して多くの刺激と学びを与えてくださった。以下、学生のリアクションペーパーの一部を紹介いたします。

「高校生までは異文化理解について考えたことがなかったが、大学生になってベーシック演習を通して異文化を意識するようになった後の状態でゲストの方のお話を聞くことができ異文化とはどのようなものかを見つめ直す機会となった。授業の中で自分が経験した異文化についての質問があったが、自分は最初、異文化とは異なる国の人との違いだけにしか頭になかった。しかし、お話を聞いて、異なる国の人だけでなく同じ国でもモノの考え方や行動が異文化になるという発見ができた。また、いろいろな国に旅をして様々な経験をしながらポジティブに物事を捉えるということは、楽しむことで自分が経験したことを吸収して活かしているように感じて見習いたいと思った。旅の話の中で急に祭りに巻き込まれた話やネズミを食べた話はインパクトがあって面白かった。自分のいともよく一人旅をしていて、荷物を置いていったために爆発物と間違えられて規制線を張られた話をしていたので、もし海外に行くことがあるならその国のことを調べてからさまざまな経験をしたいと思った。」

「岩澤さんがコロナ前は毎日のようにどこのハーフなのか、何人ですかと聞かれていたことを知り驚いた。正直私は多くても1週間に一度程度だと思ったが、社会人は初対面の人と会う機会が増え、やはり自己紹介の一環として質問されることが多いのかなと思った。私自身ハーフの子がいたら出身を聞くことに全く違和感がないが、改めて考えてみると、相手からすれば自分は日本人なのに毎回質問されて100%良い気分ではなかったかもしれない。そして、大阪の小学校に通っていた時ハーフという理由で何度も嫌な思いをした話を聞き、これは大阪の地域性が影響しているのではないかと思った。全員がそうとは限らないが、関西人は気が強い・言葉が鋭いという特徴がある。実際私も大学で初対面の大阪の男の子に話しかけられたとき、距離感が近く話し方も自信満々という感じで少し圧倒された。しかしその経験を経て海外の学校に通い始め、誰も自分の国籍を気にせず接してくれる環境で過ごしたことで、異文化交流を広めたいという思い・自身も様々な文化に触れ楽しんで受け入れたいという姿勢が生まれ、その思いを若くして起業という形で実現している岩澤さんはとてもかっこいいと思う。」

